

唐代傳奇「枕中記」の「夢」と

「異界」を巡る物語認識の變容

——『太平廣記』の分類を手がかりに——

伊藤 令子

京都大學

序

中唐の傳奇「枕中記」は、唐の開元年間、青年盧生が邯鄲の宿屋で道士呂翁から渡された枕を使うことで枕中の世界に入り、そこで立身出世する人生を過ごすも、目を覺ませばそれはほんのわずかな時間であったという物語である。

今日「枕中記」はその内容から、「邯鄲夢」や「黃梁一炊の夢」という呼稱もあり、「夢」を以て「人生の儂さ」を描いた寓話と見なされることが一般的である。かの魯迅も、『中國小説史略』第八篇「唐之傳奇文」①に「枕中記」

唐代傳奇「枕中記」の「夢」と「異界」を巡る物語認識の變容（伊藤）

を紹介するが、「生夢娶清河崔氏：（盧生は夢で清河の崔氏を娶り……）」と、主人公盧生が「夢を見ていた」ことを自明の理とする。また近年の先行研究では、物語の展開の類似から、「枕中記」は度々「櫻桃青衣」、「沈亞之」とともに唐代夢物語とみなされる。要するに現代において、これらは全て同じ「類」同じ「趣」の物語だとしてごく自然に認識されているのである。

しかし過去に遡ると、十世紀の類書『太平廣記』はこれら三作品を區別する見解を提示する。それは主にその分類に現れており、「櫻桃青衣」、「沈亞之」は『太平廣記』卷二八一、卷二八二「夢部」に、一方「枕中記」は同卷八十二「異人部」に分類された。分類とは認識の區分を示すものであり、そこには編纂の方針が體系的に表われている。言わば説話小説分野の百科全書たる『太平廣記』の分類にもまた、そうした當時の編纂者或いは編纂に携わった集團の認識の片鱗が窺えるのではないだろうか。

『太平廣記』は類書の中でも異色の存在である。例えばその分類項目を見ると、唐代の『藝文類聚』、北宋の

『太平御覽』といったその他代表的類書は、各々分類項目の配列に違いはあるものの、傾向としては天部や歳時（時序）部から地部や山部という地理関係の項目、そして帝の領域である帝王（皇王）の部、人事に属する人部と展開するのに對し、『太平廣記』は冒頭神仙部から始まり、女仙部、道術部と續いており、通常の類書であれば地部に含まれる、もしくはそこに關連づけられ近隣に配されるはずの山部は、短くまとめられ後半に配置される。さらに『太平廣記』は皇帝敕令の下成立した書であるが、詩や賦ではなく、當時文學的價值がさほど高くなかった志怪、傳奇といった所謂怪奇小説類が國家事業の名の下に多數収集され、體系的にまとめられた。加えて上表（上呈に際しての表文）はあるが序文がなく、編纂目的の自體も明らかではない。これらの點もまた『太平廣記』の特徴の一つとして挙げられる。

『太平廣記』はこのように獨自性の強い類書であるため、當然ながらそれが北宋代の人間の最大公約的なもの捉え方を直に反映しているとは言い難い。しかし近年當然の

如く、同類とみなされている「枕中記」、「櫻桃青衣」、「沈亞之」を、かつて區別する見解が存在したことは、過去から現在までの物語、あるいはその題材についての認識の變化を示す重要な手がかりとなり得る。この『太平廣記』の分類を手がかりに、「枕中記」という物語及び作中の枕中の世界、そして夢という概念についての認識の變化の一端を見ることが可能になるのではないだろうか。

ただし、本稿の目的は、「枕中記」の「枕中の世界」が夢であるという、これまでの「枕中記」の解釋を否定し、新たな「枕中記」觀を再構築することではない。また『太平廣記』の分類の妥當性を精査することでもない。ここで主に検討したいのは、あくまでも『太平廣記』の分類を契機に、現在無條件の前提となっている「枕中記」の捉え方を相對化した上で、過去と現在で「枕中記」という物語についての認識の變化がいかなるものであるかということである。

なお「枕中記」のテキストには『文苑英華』所收のものとして『太平廣記』所收のものとの二系統ある。今回は『太平廣

記』の中の「枕中記」に焦點を當てるため、テキストは主に『太平廣記』のものをを用いる。「枕中記」という題は『文苑英華』に見られ、『太平廣記』では、その題を「呂翁」とするが、本稿では作品名を「枕中記」に統一する。

また「枕中記」と並列して論じられることの多い「南柯太守傳」も一般的には夢物語とされるが、こちらについては異郷訪問譚とする見解もいくつか見られる^⑥。實際「南柯太守傳」は、淳于棼が蟻の世界「槐安國」に入るだけでなく、冥界や異類婚等の要素が複雑に絡んでおり、枕中の世界があくまでも現實社會に即している「枕中記」と單純に比較はできない。そのため「南柯太守傳」に關する検討は今後の課題とする。

一 先行研究と『太平廣記』に見られる夢の概念

(一) 先行研究における「枕中記」と「夢」

前述の魯迅を含め、多くの「枕中記」研究において焦點となるのは、作品に込められた寓意である。具體例を挙げると、竹田晃「枕中記 眞と假の間」^⑦、や尾崎裕「枕中記」

と「南柯太守傳」―その《粹》を手がかりに―^⑧、下定雅弘・森本早織「盧生は何を知ったのか?―『枕中記』の主題―」^⑨等は、それぞれ方法は異なるものの、いずれも作中盧生と呂翁の臺詞に見られる「適」の語に着目し、「枕中記」の主題や寓意を詳細に考察する。この「枕中記」の主題については諸説あるが、ここで注目したいのは、これまでの論考の是非ではなく、これらすべてが共通して、作中の枕中の世界が「夢」であることが暗黙の前提とされ、かつその「夢」は多くの場合、睡眠中に一個人が見る儂い幻として用いられる點である。

例えば尾崎は、盧生の言う「適」も呂翁の言う「適」も「夢のようにはかないものだ」と見なしていることになるのではなからうか」と述べる。また下定・森本兩氏も、物語の主題は「人生は夢の如く儂い」という點にはないと論じながらも、「南柯太守傳」については「人生は夢」の無常觀を表現した作」とし、「夢」の語そのものについては、脆く儂いものであるという概念を用いる。

このような傾向は、「枕中記」を「枕の中の世界(異

界」に入る「異界訪問譚」とした井波律子(二〇〇二年)¹¹⁾や、異郷訪問譚とみなした乾一夫(一九七八年)¹²⁾(ただし井波、乾兩氏は「枕中記」を遊魂や夢遊という形の「夢」物語であるとも述べる。)のような例を除き、多くの先行研究に共通して見られる。¹³⁾端的に言えば、現代において作中の枕中の世界は、盧生の見た儂い幻としての「夢」であることは疑問の餘地のない「大前提」となっているのである。

このような現在の大前提からすると、『太平廣記』が「枕中記」を「夢部」ではなく「異人部」に収めたことは、些か奇妙なことに感じられる。『太平廣記』のこの分類をどのように説明するのか。單純に『太平廣記』は「枕中記」を夢物語と、そして枕中の世界を盧生の「夢」とみなさなかつたと簡單に結論付けてよいのであるうか。そのように斷言する前に、「枕中記」と區別された『太平廣記』「夢部」における「夢」がいかなる性格をもつかまず考える必要がある。次節では「夢部」の物語を通してそれを検討する。

(二)『太平廣記』「夢部」の夢

『太平廣記』は、卷二七六―二八二が「夢部」であり、内部は、「夢」、「夢休徵」、「夢咎徵」、「鬼神」、「夢遊」と部門立てされる。「夢」と部門立てされる中で最も頻繁に見られるのは未來を豫兆する夢である。例えば「索充」¹⁴⁾は、夢で上着を脱いだ奴隸を夢見て、占い師がその夢から索充の妻が男兒を産むことを言い當てる。この夢占い師は豫兆型の夢の物語にたびたび登場する重要な存在である。

また神々や死者、身内や匿名の人物等が助言、啓示を與える夢物語も數多くある。「徐羨之」¹⁵⁾がその一例である。これは、徐が夢で父に「朱雀桁を渡らなければ、お前は富貴になる」と言われ、夢の通りにしたところ、後に宰相にまで出世したという内容であり、彼は夢を通じ將來のための助言を得る。

その他、死者や動物が夢を通して人間に言傳をする夢物語も收められる。例えば「桓邈」¹⁶⁾や「周氏婢」¹⁷⁾等が挙げられる。「桓邈」は、桓邈に貢物として捧げられた四羽の鴨が、桓邈の息子の夢に、人に擬態して現れ命乞いをし、夢

から覺めた後無事に彼らの命が助けられると、再度夢に現れお禮を言つて去るといふ物語である。一方「周氏婢」は、周氏の侍女が山に柴刈りに行つた際晝寢をし、夢で女性に「目の中に何かが刺さっているから抜いてほしい」と頼まれる。目覺めてみれば、棺があり、棺の中の骸骨の目の中に草が生えていたのでそれを抜いたところ、歸路にて黄金の指輪を得るといふものである。兩作品とも、現實世界では言葉を交わせない存在が、夢を通じて人間へメッセージを送るといふ内容が描かれる。

また睡眠中の身體から魂だけが抜け出す現象である「遊魂の夢（夢遊）」も「夢部」の最後に部門立てされる。夢遊といふ現象は、夢物語を扱う先行研究でも度々指摘されており、前述の乾一夫は「枕中記」をその一例に挙げている。しかし『太平廣記』が夢遊譚として「夢部」に収めたのは、「枕中記（呂翁）」の類話とされる「櫻桃青衣」や「沈亞之」であつて「枕中記（呂翁）」ではない。「櫻桃青衣」、「沈亞之」の概要は次の通りである。

「櫻桃青衣」¹⁸⁾ 盧子といふ男が、夢中の世界で自分の親族だといふ婦人の引き立てにより、立身出世、子寶にも恵まれる。しかし目覺めてみればそれはほんの短い夢であり、盧子は世の儂さを身に感じ隠遁した。

「沈亞之」¹⁹⁾ 沈亞之は索泉の宿屋で晝寢をしていると、夢の中で秦の穆公の時代に赴く。そこで沈亞之は穆公の娘弄玉の婿になるも、弄玉はまもなくして亡くなる。沈亞之は弄玉の死から立ち直れず、國外に出ていくが、その際見送りの役人と別れの挨拶を交わすうちに目が覺める。後に調べると、穆公は索泉に葬られていた。

「櫻桃青衣」は、詳しくは後述するが、そこに見られる夢の世界に睡眠中に個人が見る幻影としての側面が見られる。また「沈亞之」には、夢を通じて過去の時代に遡る、一種のタイムスリップが描かれる。兩作品とも、これまで述べたような夢の中で現實の世界に對する豫兆や啓示、あるいは何かしらの助言や言傳を受け取るといった物語とは異なり、現實から遊離した生を夢中で送るものとなつてい

る。

「夢部」の中で、夢遊の現象を描いたものは他に、主人公の魂が魚へと入り込む「韓確」(卷二八二)や、遠方にいる友人の實際の出来事を夢見た「元積」(卷二八二)等が挙げられる。その他「夢部」の「夢遊」ではなく「鬼神」に收められている物語ではあるが、「婁師德」(卷二七六)のように主人公が夢で冥界(地府院)へと赴くものである。さらに主人公の前に妻の夢の世界が具現化して現れる「獨孤遐叔」(卷二八一)、「張生」(卷二八二)も妻の意識が外へと浮遊した例と見ることができるといえる。

「夢部」の「夢遊」という部立ての中の物語ではまた、睡眠中の経験が現實に反映されることすらある。以下の「鄭昌圖」²⁰⁾がその例として挙げられる。

鄭昌圖登第歲、居長安。夜後納涼於庭、夢爲人毆擊。擄出春明門、至合大路處石橋上、乃得解。遺其紫羅履一隻、奔及居而寤。甚困、言於弟兄、而牀前果失一履。且令人於石橋上追尋得之。

(鄭昌圖登第の歲、長安に居す。夜後庭に納涼するに、夢に人の毆擊するところと爲る。擄へられ春明門を出で、大路に合する處の石橋の上に至りて、乃ち解かるるを得たり。其の紫の羅の履一隻を遺(のこ)し、奔りて居に及びて寤む。甚だ困(つか)れて、弟兄に言ふに、而して牀前に果たして一履を失ふ。且に人をして石橋の上を追尋せしめて之を得たり。)

ここでは橋に履を落としたという夢の内容が現實でも發生しており、夢と現實が互いに介入しあっている。この夢と現實の相互干渉という形式は「宋瓊」や「邢鳳」²¹⁾等他の物語にも見られ、「夢部」に見られる夢の重要な特徴の一つといえよう。

以上「夢部」の夢の特徴をまとめたが、「夢部」の物語全體の傾向として、一つ注意すべき点がある。それは大半の作品の記述に「夢」の語が見られることである。例えば「索充」では、「索充夢一虜脱上衣來詣充。(索充一虜上衣を脱ぎ充に詣で來たるを夢みる。)」と、夢という語の後に、

夢中で何があつたか記述される。「夢部」の物語は全部で一六八あり、そのうちのほとんどの作品には「夢」の一語が必ず見られるが、その一方で、「宋言」、「薛存誠」、「劉景復²²」という「夢」の語が用いられない作品も存在する。

例えば「宋言」は、宋嶽という不遇の人物が、ある日晝寝をしたところ、とある人に、嶽という名の山の部分を取り去れば、おのずから道が開けると告げられる。そこで嶽の字の、山とさらに二つの獸(犬)の部分を取り去り、宋言と改名したところ、及第したという物語である。夢中の描寫は以下のようになっている。

因晝寢、似有人報、云、宋秀才若頭上戴山、無因成名。但去之。自當通泰。²³

(晝寝するに因りて、人の報ずる有るに似たり、云ふ、宋秀才は頭上に山を戴くが若く、名を成すに因無し。但だ之れを去れ。自ずから當に通泰すべしと。)

引用部分は、「宋言(宋嶽)」がとある人から改名の指示

唐代傳奇「枕中記」の「夢」と「異界」を巡る物語認識の變容(伊藤)

を受けた場面だが、ここには晝寝という行爲はあるものの、「索充」のような「夢」の語は見當たらぬ。しかし『太平廣記』が「宋言」を「夢部」に入れたのは、晝寝の際に、宋言が「夢中」にて啓示を受けたとみなしたことを示す。

同じく「夢」の語が用いられなかった「薛存誠」は、御史臺の門番が晝寝をした際、御史中丞薛存誠の死の豫兆を見る内容であり、「劉景復」は吳の泰伯廟の近くで宴をした劉景復が、眠りの中で泰伯の宴席へと赴く物語である。つまり作中にて「夢」の一語が明記されなくとも、人が眠りを通して豫兆や、助言を得たり、あるいは別の土地へと遊んだりした場合もまた、『太平廣記』はそれを「夢部」に分類した。言い換えれば『太平廣記』にとって、眠りを通して豫兆、助言、遊魂こそが、「夢」だったのである。

未來の豫兆、豫言、警告、助言、あるいは動物、死者からの傳言、さらには遊魂、夢遊、夢中の體驗と現實の一致等、『太平廣記』「夢部」の「夢」は一見雑多な印象を受ける。しかし、「夢部」に收められた物語の夢は、眠りという行爲を通して、何かを豫兆する事物を見ることが、神々

や死者、動物との交流を可能とする。それだけではなく、時には魂が身體を抜け出し、遙か遠くの土地や、過去の時代、冥界へも辿り着け、さらには夢中の事象が現實にそのまま反映されることすらある。夢中と現實が相互干渉の關係にあるのだ。

そしてそのような不思議な經驗をするまでの過程は、眠りという行爲や「夢」という一語といった非常に單純な形で記述される。これは、「夢」が何か特定の獨立した異空間を意味しているというよりも、むしろ夢は「媒介」の一つであり、夢という現象によつて、現實世界は、不思議な光景・世界といとも容易く結合すると考えられる。

概括していえば、『太平廣記』「夢部」の夢とは、眠りを通じた、人間があらゆる境界を超えるための媒體の一種ともいえる。それは、覺醒によつて見えなくなってしまう脆さ、儚さの要素はありこそすれ、一個人の脳内でのみ發生し處理される、儚い幻影としての夢の概念とは必ずしも合致しない。ここでの「夢」とは現實と結びつき、そこに確かな痕跡を残すのである。

それではそのような夢と區別された「枕中記」の枕中の世界とはいったいどのような空間と解釋することが可能となるであろうか。「枕中記」には、眠りの要素もあり、また「夢寐」という形とはいえ「夢」の語までもありながら、『太平廣記』は「夢部」ではなく、「異人部」に分類した。つまり作中の枕中の世界は、『太平廣記』にとつての夢とは異なる空間として見ることも可能なのではなからうか。

「枕中記」の枕中の世界的特徴を考える上では、まず「枕中記」の枕中の世界について、夢であるという従來の常識の殻を外して再度検討する必要がある。次章では、「枕中記」の類話かつ「夢部」に收められた「櫻桃青衣」、「沈亞之」との比較を通して、作中の枕中の世界的空間的特徴を分析したい。

二 「枕中記」の枕中の世界

(一) 枕中の世界的空間的特徴

先行研究にて夢の一語で言い表された枕中の世界は

果たしてどのような空間といえるのか。枕中の世界の空間構造を分析する前に、まずは『太平廣記』が「夢部」に收めた「櫻桃青衣」、「沈亞之」等の「夢」を通じて訪れた世界（以下「夢中の世界」とする。）の空間的特徴を比較対象とし、「枕中記」と同様に分析したい。

前述の通り「櫻桃青衣」、「沈亞之」は、「枕中記」の類話として先行研究でも度々列擧される。實際二作品の内容は、とある男性が眠った際、夢中の世界で出世したり皇女と婚姻関係になったりするが、目覚めてみればそれはほんのひと時のことであつたというもので、物語の展開や時間構造は「枕中記」とほぼ同じである。このように一括して同種の「夢物語」とみなし得るこれらの三作品について、『太平廣記』は「枕中記」のみ別の分類に入れた。『太平廣記』の視点から見たときこれら二作品と「枕中記」は何かしらの差別化できる点があるのであろうか。

「枕中記」と、「櫻桃青衣」、「沈亞之」を比較したとき、まず挙げられる大きな相違点は、登場人物が枕中の世界あるいは夢中の世界へと赴く際の描寫（以下「往路」とする。）、

及びそれらの世界からもといた場所へと戻る描寫（以下「復路」とする。）である。さらにこの往路・復路の描寫の相違点から、枕中や夢中の世界が、登場人物のもといた世界に對していかなる空間として存在しているかということもまた窺うことができる。

まずは『太平廣記』が『夢』物語と認識した「櫻桃青衣」、「沈亞之」を見ていく。以下は「櫻桃青衣」、「沈亞之」における、盧子と沈亞之の夢中の世界への往路と、もとの場所へと戻る復路の場面である。往路・復路に直接當たる箇所は傍線を引く（以下同）。

「櫻桃青衣」…

往路…天寶初、有范陽盧子、在都應舉、頻年不第、

漸窘迫。嘗暮乘驢遊行、見一精舍中有僧開講。

聽徒甚衆。盧子方詣講筵、倦寢。夢至精舍門、

見一青衣携一籃櫻桃在下坐。

（天寶の初め、范陽の盧子有り、都に在りて舉に應ずれども、頻年第せず、漸く窘迫す。嘗て暮に驢に

乗りて遊行するに、一精舍中に僧有りて講を開くを見る。聽徒甚だ衆し。盧子方に講筵に詣るに、倦んで寝ぬ。夢に精舍の門に至り、一青衣の一籃の櫻桃を携へ下坐に在るを見る。）

復路・升殿禮佛、忽然昏醉、良久不起。耳中間講僧

唱、云、檀越何久不起。忽然夢覺、乃見著白衫、服飾如故、前後官吏、一人亦無。

（殿に升り佛に禮し、忽然として昏醉し、良久しく起きず。耳中に講僧の唱ふるを聞くに、云ふ、「檀越何ぞ久しく起きざるか」と。忽然として夢より覺め、乃ち見れば白衫を着て、服飾故の如く、前後の官吏、一人も亦無し。）

「沈亞之」⁽²⁵⁾：

往路・太和初、沈亞之將之邠、出長安城、客索泉邸

舍。春時、晝夢入秦。

（太和の初め、沈亞之將に邠に之かんとし、長安城を出で、索泉の邸舍に客す。春の時、晝に夢みて秦

に入る。）

復路・亞之與別、語未卒、忽驚覺、臥邸舍。

（亞之與に別れ、語未だ卒はらざるに、忽ち驚き覺むれば、邸舍に臥したり。）

「櫻桃青衣」での往路の場面は、「夢至精舍門」と簡潔に描寫されており、復路の場面では、盧子が佛に禮拜している最中に突然倒れ、耳に僧の聲が聞こえ忽ち目覺める。

一方「沈亞之」の往路の場面も「晝夢入秦」という四語のみで極めて簡素に記される。また復路の場面は、秦國から離れる際、別れの言葉を言い終わる前に唐突に覺醒が訪れる。

「櫻桃青衣」、「沈亞之」の往路の場面はともに、「夢」という一語を以て描寫されており、要するに單純に眠るという行爲によつて夢中の世界に至つてゐる。復路の場面では、兩作品とも、拜禮や別れの挨拶の最中という中途半端な状況の中、唐突な覺醒によつてもといた世界へと戻る。この復路の場面では、「忽然」や「忽」といった言葉が用

いられる点にも注意したい。これら二作品に見られる夢中の世界はともに、眠るという行爲のみで入ることができ、かつ突然の覚醒によって忽ち消え去っているのである。

上記二作品と類似する『夢』の描寫方法は、『太平廣記』『夢部』の他の物語にも見られる。一例として同じく「夢遊」に收められた「獨孤遐叔」を擧げよう。主人公遐叔は自宅へと歸る道すがら、自身の妻が宴に同席させられている光景を目撃する。以下はその光景が立ち消える場面である。

…遐叔驚憤久之、計無所出、乃就階陸間、捫一大磚、向坐飛擊。磚纔至地、悄然一無所有。

(遐叔驚き憤ること之を久しくするも、計の出づる所無く、乃ち階陸の間に就き、一大磚を捫み坐に向かひて飛撃す。磚纔く地に至るや、悄然として一も有る所無し。)

この後遐叔は自分が目にしたのは妻の夢が具現化した光景であったことを知る。つまり妻の夢中の光景は、瓦が投

唐代傳奇「枕中記」の「夢」と「異界」を巡る物語認識の變容(伊藤)

げ込まれるという動作によって一瞬で立ち消えるのである²⁷⁾。物語の展開こそ異なるが、何らかの契機に突然目が覺めることで、夢中の光景が忽ち消えてしまう点において、「獨孤遐叔」と「櫻桃青衣」、「沈亞之」は共通する。

前章で『太平廣記』『夢部』の夢について、「人間があらゆる境界を超えるための媒體」とまとめたが、「櫻桃青衣」、「沈亞之」や「獨孤遐叔」の夢もまた、それぞれ、別の人生を謳歌させたり、過去の時代へ遡ったり、あるいは同一平面上の別の土地へと移動させたりといった機能がある。しかしその夢のもたらす光景は同時に、覺醒により突然消滅する脆さも兼ね備えている。特に「櫻桃青衣」の夢中の世界は、「沈亞之」のようなタイムスリップの要素はなく、かつ苦難のない順風満帆な生活という現實感の乏しい内容であることから、人間の願望が見せる儂い幻影としての性格が強く、それによって人生への諦念が際立っている。

それでは、「櫻桃青衣」、「沈亞之」の往路・復路の描寫に對し、「枕中記」ではそれらはどのように描かれているだろうか。まず盧生が枕中の世界へと赴く往路の描寫を見

ていく。テキストは『太平廣記』所收の「枕中記（呂翁²⁸）より引用する。

往路・言訖、目昏思寐。是時主人蒸黃粱爲饌。翁乃探

囊中枕以授之曰、子枕此、當令子榮適如志。其枕

盜而竅其兩端。生俛首就之。寐中、見其竅大而明

朗可處、舉身而入、遂至其家。

（言ひ訖りて、目昏みて寐ねんことを思ふ。是の時主

人黃粱を蒸して饌と爲す。翁乃ち囊中の枕を探り以て

之に授けて曰く、子此に枕せよ、當に子をして榮適志

の如くならしむべしと。其の枕竅にして其の兩端に竅

つ。生は首を俛して之に就く。寐中、其の竅大にして

明朗なりて處るべきを見て、身を舉げて入り、遂に其

の家に至る。）

道士から枕を渡される前の盧生の「目昏思寐」という様
子や、枕中の世界へと入る場面での「寐中²⁹」、目を覺まし
た際の「豈其夢寐耶」の臺詞といった點から、先行研究が

枕中の世界は盧生の見た夢である³⁰と判断するのは當然
のことと思われる。さらにこのような「眠り」の要素や
「夢」の語の登場は、前章で指摘した通り、『太平廣記』
「夢部」の物語の大半に見られる。

しかし實際今日定着している物語認識を取り外して、
「枕中記」の枕中の世界と盧生がもいた世界の往路・復
路の描寫から、作中の二つの世界の關係性を見たとき、そ
れは先行研究が「枕中記」を表す語として用いた「夢」の
概念とはもちろん、前章で検討した『太平廣記』「夢部」
の「夢」³¹とも異なる要素が見出せることに氣づかされる。

枕中の世界への往路では、枕に盧生が頭をつけて眠ると、
枕の兩端にある穴が徐々に大きくなり、盧生はそこに「舉
身」つまり意識的に踏み込む。これは盧生の入った枕中の
世界には「枕の穴」という明確な入り口・通路が存在する
ことを意味する。この入り口・通路の具體的描寫は、「櫻
桃青衣」や「沈亞之」での往路の場面には出現しない要素
である。

このような往路における明らかな入り口・通路は、「夢

部」の夢物語よりもむしろ、仙界をはじめとした所謂異世界訪問譚に度々見られる。具體例として以下の二例を挙げ。どちらもとある人物が異世界を訪れる内容となっており、引用部分はその往路に當たる。

「張華」〔太平廣記〕では卷一九七「博物部」所收。以下の引用は『藝文類聚』が『幽明錄』から引いたテキストに據る^{③1}…

洛下有洞穴、不測。有一婦欲殺夫、推夫下。經多時至底、乃得一穴。匍匐行數十里、漸見明曠、郭郭宮館、金寶爲飾、明踰三光。

（洛下に洞穴有り、測るべからず。一婦有りて夫を殺さんと欲し、夫を推して下す。多時を経て底に至り、乃ち一穴を得たり。匍匐して行くこと數十里、漸く明曠なるを見れば、郭郭宮館、金寶を飾と爲し、明は三光を踰ゆ。）

「陰隱客」〔太平廣記〕卷二十「神仙部」所收^{③2}…

唐神龍元年、房州竹山縣百姓陰隱客、家富。莊後穿井

唐代傳奇「枕中記」の「夢」と「異界」を巡る物語認識の變容（伊藤）

二年、已濬一千餘尺而無水。隱客穿鑿之志不輟、二年外一月餘、工人忽聞地中鷄犬鳥雀聲。更鑿數尺、傍通一石穴。工人乃入穴探之。初數十步無所見、但捫壁傍行、俄轉有如日月之光、遂下、其穴下連一山峰。工人乃下山、正立而視、則別一天地日月世界。

（唐の神龍元年、房州の竹山縣の百姓陰隱客は、家富む。莊の後に井を穿つこと二年、已に濬ふこと一千餘尺なれども、水無し。隱客穿鑿の志を輟めず、二年の外に一月餘して、工人忽ち地中に鷄犬鳥雀の聲を聞く。更に鑿つこと數尺、傍らに一石穴を通ず。工人乃ち穴に入り之を探る。初め數十歩見る所無し、但だ壁を捫みて傍らを行くのみ、俄に轉じて日月の光の如き有り、遂に下れば、其の穴下のかた一山峰に連なる。工人乃ち山より下り、正立して視れば、則ち別の一天地日月世界なり。）

六朝の志怪集『幽明錄』所收の「張華」では、男が穴に入り進んでいくと、明るく開けた所に出て異世界へと至る^{③3}。また唐代傳奇の「陰隱客」では、工人は穴に入って天地日

月を異にする異世界へと赴く。兩者ともに、別世界へと至るにあたり、入り口となる穴と通路が登場する點は「枕中記」の往路の場面と一致する。これらに現れる明確な入り口・通路は、人界と異世界を區別する存在ともいえる。

往路の點から見れば、「櫻桃青衣」、「沈亞之」では、夢の媒介によつて現實と睡眠時の光景・世界が連続的になる一方、「枕中記」では、盧生のもといいた世界と枕中の世界は、明確な入り口・通路を以て區別され、正しく異世界へ「訪問」する形式をとっている。

次に、盧生がもといいた世界へと戻る復路の描寫は以下の通りである。

復路…其夕卒。盧生缺伸而寤、見方偃於邸中。顧呂翁

在傍、主人蒸黃梁尙未熟、觸類如故。蹶然而興曰、豈其夢寐邪。

(其夕卒す。盧生缺伸して寤め、方に邸中に偃するを見る。顧みれば呂翁傍らに在り、主人黃梁を蒸して尙ほ未だ熟せず、觸類故の如し。蹶然として興きて曰く、

豈に其れ夢寐なるかと。)

「櫻桃青衣」や「沈亞之」のように、忽ち目を覺ましたことでもとの世界へと戻ったわけではなく、盧生は枕中の世界で一生涯を過ごし、八〇歳で大往生した後に、もといいた世界へと戻る。この復路では、「死」という明確な區切りがもといいた世界へと回歸する條件となる。盧生は枕中の世界で生涯を終えることによつて、そこで生活する資格を失い、もともと彼が生きていた世界へと歸還するのである。この復路の描寫もまた、「櫻桃青衣」、「沈亞之」にて、盧子や沈亞之が、唐突な覺醒によつてもとの世界へ引き戻された點と相違する。

「枕中記」において、枕中の世界は明確な入り口を持ち、その世界の中で生命が盡きればもといいた世界へと歸還する、つまり盧生は二つの生涯を生きたこととなり、「枕中記」の物語には異なる二つの世界及び時間の流れが同時進行していたといえる。

注目すべきは、この枕中の世界は道士呂翁から渡された

枕の中に存在していた點である。この點から、枕中の世界は盧生が無意識の中で見た幻ではなく、「枕」という可視的かつ實體をもった空間の内部に存在するものとして描寫されていることが明らかになる。そこには「櫻桃青衣」、「沈亞之」の夢を通して訪れた世界の、空間としての、「實體の無さ」は見られない。

この何かしらの物體の中にこの世とは異なる空間が存在する物語は、實は「枕中記」以前にも存在する。『後漢書』卷八十二下「方術列傳下」費長房傳に、壺の中に別世界が存在していたという故事があり、以下はその往路に當たる部分である。³⁵⁾

費長房者、汝南人也。曾爲市掾。市中有老翁賣藥、懸一壺於肆頭。及市罷、輒跳入壺中。市人莫之見、唯長房於樓上觀之、異焉。因往再拜奉酒脯。翁知長房之意其神也、謂之曰、子明日可更來。長房旦日復詣翁、翁乃與俱入壺中。唯見玉堂嚴麗、旨酒甘肴盈衍其中、共飲畢而出。

唐代傳奇「枕中記」の「夢」と「異界」を巡る物語認識の變容（伊藤）

（費長房は、汝南の人なり。曾て市掾となる。市中に老翁有りて藥を賣り、一壺を肆頭に懸く。市の罷はるに及べば、輒ち壺中に跳び入る。市人これを見ること莫く、ただ長房のみ樓上に之を觀て、焉を異しむ。因りて往きて再拜し酒脯を奉ず。翁長房の其の神なるを意（おも）ふを知り、之に謂ひて曰く、子明日更めて來るべしと。長房旦日復た翁に詣（い）たれば、翁乃ち與俱（とも）に壺中に入る。唯だ玉堂嚴麗にして、旨酒甘肴其の中に盈ち衍るるを見、共に飲み畢はりて出づ。）

また六朝志怪には、「枕中記」と同様に枕の中の世界で別の人生を送るという物語がある。この物語は、出典を『幽明錄』とし、『北堂書鈔』『服飾部』枕に收められる。以下はその全文である。³⁶⁾

幽明錄云、焦湖廟祝有柏枕、三十餘年。枕後一小塚孔。縣民湯林行賈、經廟祈福。祝曰、君婚姻未、可就枕塚邊、令林入塚內、見朱門、瓊宮、瑤臺勝於世。見趙太

尉、爲林婚、育子六人。四男二女。選林祕書郎、俄遷黃門郎。林在枕中、永無思歸之懷、遂遭違忤之事。祝令林出外間、遂見向枕、謂、枕內歷年載、而實俄忽之間矣。

(幽明錄に云ふ、焦湖廟の祝に柏枕有り、三十餘年。枕の後ろに一小垢孔あり。縣民湯林行賈し、廟を経て福を祈る。祝曰く、君婚姻未だならざれば、枕の垢邊に就くべしと、林をして垢内に入らしめて、朱門、瓊宮、瑤臺世に勝るを見る。趙太尉に見え、林の爲めに婚すれば、子六人を育む。四男二女なり。林を祕書郎に選じ、俄かに黃門郎に遷す。林枕中に在りて、永く思歸の懷無きも、遂に違忤の事に遭ふ。祝は林をして外間に出でしめ、遂にさきの枕を見(しめ)して、謂ふ、枕内年載を歷るも、しかるに實に俄忽の間なりと。)

ここでは枕にある小さな裂け目という枕中の世界へと入る明確な入り口・通路があり、もとの世界へ戻る際も、巫に連れ出されており、夢や眠りに結び付く要素はない。作中の枕は睡眠の道具というより、その内側に人界と異なる

空間を有す働きのみを示すのである。

この物語にはまた、商人の名を楊林とする系統のテキストもあり、「楊林」の題で『太平廣記』巫部に收められる。こちらにも出典は『幽明錄』とされる。

「楊林」³⁶⁾

宋世、焦湖廟有一栢枕、或云玉枕。枕有小垢。時單父縣人楊林爲賈客、至廟祈求。廟巫謂曰、君欲好婚否。林曰、幸甚。巫即遣林近枕邊。因人垢中、遂見朱樓瓊室。有趙太尉在其中、即嫁女與林。生六子、皆爲祕書郎。歷數十年、竝無思歸之志。忽如夢覺、猶在枕傍。林愴然久之。

(宋世、焦湖廟に一栢枕有り、或ひは玉枕と云ふ。枕に小垢有り。時に單父縣の人楊林賈客爲り、廟に至り祈求す。廟の巫謂ひて曰く、君好婚を欲するや否やと。林曰く、幸(ねが)ふこと甚しと。巫は即ち林をして枕の邊に近づかしむ。因りて垢中に入り、遂に朱樓瓊室を見る。趙太尉の其の中に在る有り、即ち女を嫁して林に與ふ。六子を生み、皆祕書郎

と爲る。數十年を歴て、竝びに歸ることを思ふの志無し。忽ち夢より覺むるが如くして、猶ほ枕の傍に在り。林愴然たること之を久しくす。

枕の穴が、別の人生を送る空間の入り口となっている點は、『北堂書鈔』に收められたものと共通するが、こちらは「忽ち夢から覺むるが如く」と、『枕中記』のような死という區切りではなく、突然前觸れもなくもとの場所へ回歸する。

『北堂書鈔』のテキストに比べ、『太平廣記』に引かれた「楊林」には、復路の描寫が、「櫻桃青衣」、「沈亞之」と類似する點はある。しかし、枕中の世界へと入る場面で明確な入り口が存在し、また復路の場面もあくまでも「夢から覺むるが如く」すなわち夢ではないと明記される。前述の仙界訪問譚や『後漢書』の故事に加え、これらの『北堂書鈔』、『太平廣記』がそれぞれ引いた焦湖廟の枕の故事を見たとき、「枕中記」の枕中の世界は、むしろ夢や眠りと關わりない型の異世界訪問譚に端を發していると思

唐代傳奇「枕中記」の「夢」と「異界」を巡る物語認識の變容（伊藤）

われる。特に『北堂書鈔』のテキストでは、もとの世界と枕の内部世界とを往來するに當たり、就寢や目覺めという睡眠に關わる要素は一切記されない。つまりここでの「枕」は、異空間を内包する物體であり、單なる睡眠の道具ではないのである。このような先行例とともに、枕中の世界的空間的特徴について考えたとき、「枕中記」という題の「枕中」は、眠りの中を示すというよりも、文字通り「枕の中」という空間を提示すると見なし得るのではなからうか。

さらに次章で詳述するが、「枕中記」の枕中へと盧生を導く道士呂翁の存在も重要である。「櫻桃青衣」も「沈亞之」も夢中の世界に入るに當たり、呂翁のような案内人は存在しない。しかし前述の『後漢書』の故事や、焦湖廟の枕の物語ではそれぞれ、藥賣りの翁や巫という、一般人を異空間へと誘う存在が明記される。この「案内人」の存在の有無という點でも、「枕中記」は「夢部」の「櫻桃青衣」、「沈亞之」とは異なる。空間構造、そして案内人の存在という二點から見れば、「枕中記」の枕中の世界は、夢を題

材としない異世界訪問譚に近似する。

ただし「枕中記」の枕中の世界は、その内部描寫を見ると、獨自の特徴も備えている。次節ではそれについて論じる。

(二) 枕中の世界の内部描寫

『枕中記』に登場する枕中の世界の内部描寫には、通常の異世界訪問譚には見られない特徴がある。例えば盧生が枕の穴に入った直後の場面が挙げられる。

娶清河崔氏女、女容甚麗而產甚殷。由是衣裘服御、日已華侈。明年、舉進士、登甲科、解褐授校書郎、應制舉、授渭南縣尉、遷監察御史、起居舍人、爲制誥。

(清河崔氏の女を娶り、女容甚だ麗にして產甚だ殷なり。是に由りて衣裘服御、日に已だ華侈なり。明年、進士に擧げられ、甲科に登り、褐を解き校書郎を授けられ、制舉に應じて、渭南縣尉を授けられ、監察御史、起居舍人に遷り、制誥と爲る。)

まず枕中の世界に入った後盧生は清河の崔氏の娘を娶るが、前述の乾一夫の「枕中記の構想」によると、清河の崔氏は實際に「魏・晉以來の豪族で、唐代有數の名門」であり、その娘を娶ることは「當時最高の結婚であった」という。³⁹⁾ また盧生はその後「校書郎」→「監察御史」→「起居舍人・知制誥」と唐代當時の文官にとつて極めて順調な昇進の過程を辿っている。このように、枕中の世界が唐代當時の社會狀況を反映した現實的なものであるという指摘は、先行研究においても見られる。⁴⁰⁾ 時間の流れの速さこそ異なるが、「枕中記」に登場する枕中の世界は、盧生が生きていた唐代の社會狀況を忠實に再現した竝行世界といえる。しかしさらに注目すべきはその記述である。盧生が異世界に入ったすぐ後には、「娶清河崔氏女」や「舉進士、登甲科」と盧生の人生の様相が重點的に描かれる。この記述態度は盧生が異世界で死を迎えるまで一貫している。ところが盧生が訪れた土地の名前や、その當時の盧生の狀況については詳述される一方で、そこにいかなる事物や風景があるかはほとんど記されない。枕中の世界の内部描寫は、

そこで生きる盧生の人物傳が主要素となっており、謂わば史傳的な記述態度が色濃く現れているのである。

この記述態度は、「櫻桃青衣」の夢中の世界、及び前述の仙界訪問譚の内部描寫と比較した時、より浮き彫りになる。以下は「櫻桃青衣」において主人公盧子が夢中の世界へと入った後出會った召使に連れられ、彼の親戚だという婦人の家に向かう描寫である。

盧子便隨之。過天津橋、入水南一坊、有一宅、門甚高大。盧子立於門下、青衣先入。少頃、有四人出門、與盧子相見。皆姑之子也。一任戶部郎中、一前任鄭州司馬。一任河南王曹、一任太常博士。二人衣緋、二人衣綠、形貌甚美。相見言敘、頗極歡暢。斯須、引入北堂拜姑。姑衣紫衣、年可六十許、言詞高朗、威嚴甚肅。

（盧子便ち之に隨ふ。天津橋を過ぎ、水南の一坊に入るに、一宅有り、門甚だ高大なり。盧子門下に立ち、青衣先に入る。少頃にして、四人の門を出づる有りて、盧子と相見ゆ。皆姑の子なり。一は戶部郎中に任ぜられ、一は前に鄭州司馬に任

ぜらる。一は河南王曹に任ぜられ、一は太常博士に任ぜらる。二人は緋を衣(き)、二人は綠を衣て、形貌甚だ美し。相見て言敘し、頗る歡暢を極む。斯須にして、引かれて北堂に入りて、姑に拜す。姑紫衣を衣て、年六十ばかり、言詞高朗にして、威嚴甚だ肅たり。)

「櫻桃青衣」の夢中の世界は、「枕中記」と同様に唐代社會が反映されており、神祕的な事物は登場しないものの、盧子が親戚の婦人の屋敷に至るまでの描寫は、「過天津橋、入水南一坊」とその経路が記され、また屋敷についても、門が高いといった様子や、その家にどのような人々がいるのが詳述されており、盧子の視點の移動に従つて情景が具體的になつていく。つまり作中の夢中の世界は敘景的な筆致で描かれており、史傳的筆致で記された枕中の世界とはその記述態度が對照的であるといえる。

更にこのような敘景的な筆致は、仙界訪問譚の異世界の内部描寫にてより顯著に見られる。前節で取り上げた「陰隱客」がその一例である。以下は「陰隱客」で工人が、穴

を通つて異世界へと辿り着いた後の場面である。

其山傍向萬仞、千岩萬壑、莫非靈景。石盡碧琉璃色、每岩壑中、皆有金銀宮闕。有大樹、身如竹有節、葉如芭蕉、又有紫花如盤。五色蛺蝶、翅大如扇、翔舞花間。五色鳥大如鶴、翱翔樹杪。每岩中有清泉一眼、色如鏡、白泉一眼、白如乳。工人漸下至宮闕所。欲入詢問、行至闕前、見牌、上署曰、天桂山宮、以銀字書之。

(其の山傍萬仞に向(なんな)んとし、千岩萬壑、靈景に非ざる莫し。石盡く碧琉璃色、岩壑中毎に、皆金銀の宮闕有り。大樹有り、身は竹の如く節有りて、葉は芭蕉の如く、又紫花有りて盤の如し。五色の蛺蝶は、翅大なること扇の如く、花間に翔舞す。五色の鳥は大なること鶴の如くして、樹杪を翱翔す。岩中毎に清泉一眼有り、色鏡の如く、白泉一眼、白きこと乳の如し。工人漸く下りて宮闕の所に至る。入りて詢問せんと欲し、行きて闕前に至り、見れば牌上に署して曰く、天桂山宮と、銀字を以て之を書く。)

ここには異世界内部の風景や動植物が鮮やかに描出される。風景が人界には存在しない事物で構成される點は「櫻桃青衣」とは異なるが、主人公の視點から見たその土地の風景を具體的に描く態度は共通する。このような敘景的筆致は、「櫻桃青衣」、「陰隱客」に限らず、前述の「張華」や、記述そのものは簡潔であるが、『後漢書』の費長房の故事、焦湖廟の枕の物語など、所謂異世界訪問譚の多くに見られる。ところが「枕中記」における枕中の空間内部は、敘景的に描くことはなされず、史傳の如き筆致で敘述され、その記述方法によつてあたかも史實であるかのような効果が生まれている。枕中の世界は、盧生がそこでいかなる人生を歩んだかという一代記で構成されているのである。

枕という實體のある空間内に存在する世界と、盧生の別の生涯の様相という史傳的描寫、「枕中記」の枕中の世界は言わばもう一つの「現實世界」という並行世界としての特徴をもつといえる。

また以上で分析した枕中の世界の空間構造・内部描寫の特異性に加えて、『太平廣記』の「異人部」という分類や

「呂翁」という題の問題を考えたとき、現在認識されている「枕中記」の物語像とは異なる「枕中記」像がより明確に浮かび上がる。次章では、「枕中記」が『太平廣記』「異人部」という枠組みに収められた事實から、『太平廣記』の認識したであろう「枕中記」像を検討したい。

三 『太平廣記』の「枕中記」に對する

認識とその變容

「枕中記」は夢物語の一つであるという従来の暗黙の了解を取り除いた上で、枕中の世界を考察したとき、それは先行研究で度々前提とされる儂い幻としての夢や、あるいは『太平廣記』「夢部」に見られる現世の人間と不可思議な事物とを結びつける媒介としての夢というよりも、人界とは別個に存在する異空間とみなすことも可能となる。それにもかかわらず、現在「枕中記」を読んだ読者は、それを即座に夢物語と判断する。その原因はやはり、前章でも述べた通り、作中に盧生の眠りの要素が見られる上に、盧

生の意識が捉えた枕中の世界は「夢寐」であつたことが明記されるからであろう。實際作者の沈既濟自身も（それが今日的な概念であれ、遊魂としての概念であれ）夢を扱うという意識の下物語を描いたのかもしれない。

しかし本稿が扱う問題は作者の意圖がいかなるものか、あるいは枕中の世界が眞實に夢なのか否かという点にはない。ここで重要なのは、これだけ眠りや夢に直結するキーワードが作中に散見するにもかかわらず、『太平廣記』はなぜ夢の物語と捉えなかつたのかという点にある。

枕中の世界は空間構造の面から見れば、夢とは無関係の異世界訪問譚に近似する。本章ではその空間的特徴を踏まえた上で、『太平廣記』の「枕中記」に對する認識を検討したい。『太平廣記』の捉える「枕中記」及び枕中の世界とは果たしてどのようなものであつたのだろうか。

『太平廣記』は「枕中記」を掲載するにあたり、『文苑英華』の採用した「枕中記」という題は用いず、青年盧生を枕の中に導いた道士、「呂翁」を題とし、さらに分類も

異人部に收めている。分類の枠組みから「枕中記」を検討する前に、まずこの『太平廣記』における「異人」とは何か考えたい。

『太平廣記』異人部は主に、豫知能力や、難病を治す異能、不思議な植物や道具を持つもの、あるいは風體そのものが異形であるなど、能力的に、または身體的に一般人とは「異なる」人物の物語を収める。

例えば、「枕中記〔呂翁〕」と同じく道士が登場する「掩耳道士」^④という物語がある。

「掩耳道士」…

利州南門外、乃商賈交易之所。一旦有道士、羽衣縑縷、來於稠人中、賣葫蘆子種、云、一二年間、甚有用處。每一苗只生一顆、盤地而成。兼以白土畫樣於地以示人、其模甚大。逾時竟無買者、皆云、狂人不足可聽。道士又以兩手掩耳急走、言、風水之聲何太甚耶。巷陌孩童、競相隨而笑侮之、時呼爲掩耳道士。至來年秋、嘉陵江水、一夕泛漲、漂數百家。水方渺瀾。衆人遙見道士在

水上。坐一大瓢、出手掩耳、大叫、水聲風聲何太甚耶。泛泛而去、莫知所之。

（利州の南門外は、乃ち商賈交易の所なり。一旦道士有り、羽衣縑縷たりて、稠人の中に来りて、葫蘆子の種を賣りて、云ふ、一、二年間、甚だ用ふる處有り。一苗毎に只一顆のみを生じ、地を盤りて成ると。兼せて白土を以て地に様を畫き以て人に示すに、其の模甚だ大なり。時を逾へ竟に買ふ者無し。皆云ふ、狂人聽くべきに足らずと。道士また兩手を以て耳を掩ひ急ぎ走りて、言ふ、風水の聲何ぞ太甚（はなは）だしきやと。巷陌の孩童、競ひて相ひ隨ひて之を笑ひ侮りて、時に掩耳道士と呼び爲す。來たる年の秋に至り、嘉陵江の水、一夕にして泛漲し、數百家を漂わしむ。水方に渺瀾たり。衆人遙かに道士の水上に在るを見る。一大瓢に坐し、手を出し耳を掩ひて、大ひに叫ぶ、水聲風聲何ぞ太甚だしきやと。泛泛として去り、之く所を知る莫し。）

人々が狂人扱いしていた道士が、實は洪水を豫見しその對策までしていたという内容だが、ここに描かれる道士は、

決して人々から崇め奉られる神仙のような存在ではない。道士は洪水が来る前も後も、變わらず耳を兩手で塞ぎ、水と風の音の甚だしさを訴えるばかりで、その後どこへとも知らず去ってしまう。この物語には市井に現れた異能の人物が強烈に描かれる。「異人部」にはこのような異能の道士の他、隱者や豫言者の物語も見られる。さらに實在の詩人だと思われる王梵志が、樹木の中から産まれたという物語（『太平廣記』卷八二「王梵志」）も収録される。

「異人部」の異人はその特殊性こそ様々であるが、共通するのは、まず特定の確固たる身分を持たないことにある。彼らは道士や隱者と表現されることはあれども、官人などの地位もなければ、ましてや神仙のような存在でもない。彼らはいくまでも「異能をもつ人物」として描かれる。これらの物語の多くは異人の名を題に掲げ、物語は基本的に異人と一般人との交流、そしてそこで發揮される異人の能力を描く傾向にある。上述の「掩耳道士」は正にその典型といえよう。そして異人の存在を確認できるのは、天界や仙界ではなく、人間世界の範圍内にあり、その中で彼らの

存在が際立つという點も重要である。

それでは「枕中記」に登場する「異人」とは誰か。これは靈的な力を持ち、邯鄲の宿にて一般の青年盧生に對してその力を發揮した道士呂翁を指すと考えて間違ひなからう。このような『太平廣記』における「呂翁」という題及び異人部という分類、さらには物語の出だしが「開元十九年、道者呂翁」と呂翁の存在から開始する點から「枕中記」という物語を見たとき、『太平廣記』は「枕中記」を、主人公呂翁が、人間の若者盧生を導くために、枕中の世界でのもう一つの人生に誘った物語と捉えたと考えることができる^④。

これは従來のような、青年盧生がもう一つの生涯の體驗を通して、人生觀を變えた物語という解釋とは視點が大きく異なる。『太平廣記』にとつて物語の主體となるべき存在は、枕を通じてもう一つの人生を歩んだ盧生ではなく、枕を盧生に渡した道士呂翁なのである。

枕の存在もまた、通常は寢具であり、眠氣に襲われた盧生が枕に頭をつけることは即ち「眠る」、「夢を見る」こと

と直結する^{④4}。しかし呂翁を主體としたとき、作中の枕及び枕中の世界は、道士呂翁が所有した、あるいは用意した仕掛や道具としての要素が強くなる。このような観点から枕中の世界をみたとき、それは盧生の無意識下に見た幻、あるいは夢を媒介に遊んだ儂い空間というよりも、むしろ前章で論じたような、枕という物體に詰め込まれた竝行世界としての側面が窺えるのではないか。枕中の世界は、道士呂翁が意圖的に用意した空間であり、そこに入り込み生活する盧生の背後には、彼がもっていた世界にて清明に覺醒した呂翁が存在するのである。この點もまた、「夢部」の夢遊とは大きく異なる。

また前述の六朝志怪「楊林」についても、『太平廣記』は枕中の世界に誘われた楊林の名を題にこそすれ、それを巫部に入れた點から、やはり「枕中記」と同様の判断を下していると思われる。「楊林」もまた枕や「忽如夢覺」といった夢や眠りを連想させる要素を持つ物語でありながら、『太平廣記』は、巫が楊林を枕中の世界へ誘った物語と捉えたのではなからうか。實際楊林が枕中の世界へと入る場

面では「巫即遣林近枕邊」と、使役の形で記述されており、楊林ではなく巫が主體となっている。

つまり北宋の『太平廣記』では、「枕中記」は、自身の所有する枕中の空間に凡人盧生を引き込み、かつ彼に別の人生を歩ませた「異人」の物語と捉えられているのである。

『太平廣記』時點では呂翁主體と捉えられた「枕中記」は、多くの先行研究での「枕中記」に對する認識からわかる通り、その後「盧生が自身の人生を夢見た夢物語」とむしろ盧生主體とみなされる^{④5}。このような物語認識の變容は、必ずしも近年突發的に發生したわけではなく、「枕中記」成立以後の受容の様相を見ていくと、十一世紀頃には既にその片鱗が窺える。

「枕中記」について言及する最も古い文獻としては、中唐の李肇『唐國史補』^{④6}がある。李肇は「沈既濟撰枕中記、莊生寓言之類（沈既濟の撰する枕中記は、莊生寓言の類なり）」と述べた上で、韓愈「毛穎傳」とともに、「二篇真良史才也（二篇眞に良史の才なり）」と評價し、「枕中記」と莊子の寓言の手法との類似性や、史傳としての秀逸性を述べ

る。前述の通り、敘事に徹する史家の筆致は、確かに「枕中記」では色濃く觀察されるが、ここで注意したいのは、『唐國史補』が物語を「枕中記」と表す点である。

李肇より少し下り、房千里「骰子選格序」⁴⁶にも、「枕中記」への言及があり、「枕中記」を「沈拾遺述枕中事（沈拾遺の述す枕中の事）」と表現する。そして十世紀、『太平廣記』は題を「呂翁」とし「異人部」に収め、『文苑英華』は題を「枕中記」とし、寓言の部に収めた。なぜここで「枕中記」を表現する言葉に注目するのかというと、「枕中記」を表す語が宋代以後變化するためである。

例えば十一世紀北宋の詩人が「枕中記」をふまえて詠んだ詩歌がその例として挙げられる。以下は王安石の詠んだ詩の一部である。

王安石「與耿天鷹會話」⁵¹：

邯鄲四十餘年夢、相對黃梁欲熟時。

（邯鄲四十餘年の夢、相對する黃梁熟せんと欲する時。）

唐代傳奇「枕中記」の「夢」と「異界」を巡る物語認識の變容（伊藤）

また南宋の范成大は自身の「邯鄲道」という絶句の詩題に對し、自ら「即昔人作黃梁夢處（即ち昔人黃梁夢を作りし處）」と注をつける。⁵¹ 同様に南宋の洪邁は「容齋隨筆」⁵²にて、「列子」「西極化人」の解説に際し、「豫然後知唐人所著南柯太守、黃梁夢、櫻桃青衣之類、皆本乎此。（豫然る後に唐人の著する所の南柯太守、黃梁夢、櫻桃青衣の類、皆此を本とするを知る。）」と、「南柯太守傳」、「枕中記」、「櫻桃青衣」へ「西極化人」が與えた影響を指摘する。これら二例において「枕中記」は「黃梁夢」と稱される。⁵³

北宋、南宋の「枕中記」を題材とした詩には、「枕」の語を使用する例もいくつかあるが、全體的な傾向として、物語としての「枕中記」は邯鄲、夢、黃梁といった語が代表することとなる。一方で「異人」呂翁の操る枕⁵⁴という仕掛けは、それに反して作品中から影を潜めていく。

特に「黃梁」の語は、盧生が目覺めれば、枕中に入る前に宿屋の主人が蒸していた黃梁がまだ出來上がっていないかかったという場面が由來であり、盧生の過ごしたもう一つの人生がもとの世界ではほんの僅かの時間であったという時

間の流れを象徴的に示す語として用いられたと思われる。十一、十二世紀の文人にとって、「長い生涯も實は儂いものである」という時間的特性こそ「枕中記」という物語の最も重要な要素であったかのように。

作中の「枕中」という語も、物語が成立した中唐から、『太平廣記』や『文苑英華』の編纂された十世紀頃までは、少なくとも物語の重要な一要素と認められていたと思われるが、十一、十二世紀ごろには、「枕」よりも、盧生の眠りや、わずかな時間を示唆する「黄粱」の語に重點が置かれる。こうした觀點は、盧生を主體として物語を見たとき生じるものだといえる。長いもう一つの人生も、目覺めた際の時間の流れの隔たりも全て盧生を通して體感できることであるからである。十一世紀と十二世紀は、まさに讀み手の「枕中記」に對する認識の過渡期ともいえるのではなからうか。

結 び に

多くの先行研究からもわかる通り、近年「枕中記」は

「盧生が眠りの中で自身の別の生涯を夢見た『夢物語』と捉えられ、一般的には「人生は夢の如く儂い」という主題がそこに表現されていると解釋される傾向にある。つまり現在「枕中記」で盧生が別の生涯を過ごした枕中の世界は、盧生個人の見た『儂い幻』とみなされている。

このような今日の物語認識とは裏腹に、北宋の『太平廣記』は「枕中記」を「夢部」ではなく「異人部」に分類した。『太平廣記』「夢部」の『夢』は、睡眠によつて人間と死者や神々等の存在とを、また時には冥界という異界や過去の時代をも結びつける媒介経路という神秘的な機能を備えており、單なる『儂い幻』とはいえない。しかし「枕中記」が「夢部」に收められなかったということは、『太平廣記』が、「枕中記」を「盧生が『夢』という媒介経路を通じて別の人生を過ごす枕中の世界へ赴いた」物語とは捉えなかつたことを意味する。

一方「異人部」には「市井に現れた特殊能力者の物語」が主に收録される、換言すれば『太平廣記』は、「枕中記」を前述のような盧生主體のものではなく、凡人盧生を

導く異人呂翁が主體の物語と捉えたのである。

『太平廣記』のように呂翁を主體とした場合、作中の「枕」ないしは「枕中の世界」の位置づけも大きく異なる。というのも、呂翁が「異人」たり得るのは、まさに盧生に別の生涯を送らせるための異空間を内包する「枕」を所有し、そこに盧生を導き、人生を悟らせるからである。この場合の枕中の世界は、盧生個人の見た儂い幻ではなく、呂翁が自身の神通力の下にある枕を通して盧生を導く空間となる。「枕中記」の記述中には、眠りや夢といった要素が確かに見られる一方で、實際物語についての従來の「常識」を取り外して、作中に描かれる枕中の世界の空間構造を分析してみると、そこには仙界をはじめとした異世界の要素もまた明白に觀察することができる。更にその空間内部については、史傳的筆致で盧生の死ぬまでの一代記が描かれ、言わば竝行世界さえも形成されているといえる。ところが冒頭でも述べた通り、後世においては「異人」呂翁の持つ枕の特殊性はさほど注目されず、枕の穴を入口としてその奥に見出すこともできたはずの異空間もまた盧

唐代傳奇「枕中記」の「夢」と「異界」を巡る物語認識の變容（伊藤）

生の見た儂い虚構として處理されるようになる。「枕中記」に對する讀者の認識において、物語の主體は道士呂翁ではなく、一般の青年盧生へと移行し、複数の解釋が可能であった物語は、現在「盧生が自身の別の生涯を夢見た物語」として一元化されたのである。そしてこの物語認識の變容は、盧生が枕中にて過ごした時間の儂さを象徴的に示す語である「黃梁」が物語を代表する語として多用され、物語中の「枕」の役割が影に隠れ出した十一、十二世紀頃にはすでにその萌芽が見られる。

このような力點の變化と、枕中の世界から「異空間」としての意義が失われ、儂い幻として捉えられるようになったこととは、恐らく密接な關係を有するはずである。

「枕中記」はいかなる過程から後世の讀者に「人生の儂さを主題とした夢物語」と認識されたのか、そして作中の枕中の世界もまたいかなる過程を辿り、個人の見える儂い幻としての「夢」に集約されたのか。

これらの物語中の異空間と「夢」の系譜についての探求は、次の作業となる。

註

① 魯迅『中國小説史略』第八篇「唐之傳奇文」(魯迅『魯迅全集』卷八、人民文學出版社、一九五七年)五四―六一頁

② 前掲注①、五七頁。

③ 「櫻桃青衣」は、劉開榮「道教思想の人生觀與社會背景―枕中記與南柯太守傳」(劉開榮『唐代小説研究』(商務印書館、一九四七年)第五章、八三―九五頁)、赤井益久「枕中記―校辯」(中國古典學會『中國古典研究』第五一號、二〇〇六年、一―二十頁)等で「枕中記」に類する夢物語として取り上げられている。内山知也「唐代小説の夢について(昔話から物語文學へ)」(中國文化研究會編『中國文化研究會會報』、一一號、一九五五年、六三―七〇頁)では、「枕中記」、「南柯太守傳」、「櫻桃青衣」、さらに「秦夢記」を「自己の生涯を見る夢」として一括する。尾崎裕「志怪・傳奇の夢について―『太平廣記』「夢」所收の話を手がかりとして―」(中國藝文研究會『學林』第三二號、二〇〇〇年、八七―一一一頁)でも、それら四作品を「夢に別世界に遊んだ話」とする。

④ 地部が後半に配置される點に關しては、『北堂書鈔』にも同様の特徴が見られるが、こちらは帝部という皇帝に關連する部から始まる。その點から見ると、國家事業として編纂された類書であるにも關わらず、『太平廣記』に本來類書が前半に配置する天や皇帝といった項目がなく、分類項目が神仙、女仙、道術…と道教や仙人に關わるものから開始されるのは

やはり異例であるように思われる。

⑤ これら二系統のテキストに關しては、王夢鷗『陳翰異聞集校補考釋』(藝文印書館、一九七三年)に次の指摘が見られる。

一本單篇流行、一則輯入異聞集。其單篇流行者、蓋猶近於沈既濟之舊文…其輯入異聞集者、則頗遭編者陳翰竄改、使原文益就於通俗。前者至北宋復轉輯入於文苑英華卷八三三萬言類…後者則於同時稍後亦見輯於太平廣記卷八二異人類、改題曰「呂翁」。(四四頁)

(一つは元々單篇で流布し、一つは『異聞集』に収録された。單篇で流布したものは、思うに沈既濟のもとの文章に近い。『異聞集』に収録されたものは、編者陳翰に大きく改訂され、もとの文はいっそう通俗的にされた。前者は北宋に至りまた『文苑英華』卷八三三萬言の類に収録された。後者は同時期またはやや後れてまた『太平廣記』卷八二異人の類に入れられ、題を『呂翁』と改められた。)

※ただし實際は『太平廣記』は太平興國三年(九七八年)に李昉等によつて上表文が提出され、一方『文苑英華』の編纂は太平興國七年(九八二年)から着手され、雍熙三年(九八六年)に完成しており、成立は『太平廣記』が先である。そのためこの「後者則於同時稍後…」という記述に誤りが見られる點には留意すべきであろう。

- ⑥ 清水榮吉「中國の小説と説話における夢」(天理大學學報)第二十輯、一九五五年、八一頁〜九二頁)、森英雄、門脇康文「南柯太守傳」の夢について―離魂譚としての視點から(大東文化大學漢學會編『大東文化大學漢學會誌』五五號、四九頁〜七三頁、二〇一六年)、葉山恭江「太平廣記」における「夢のごとし」…唐代傳奇「南柯太守傳」は夢の話か(大東文化大學漢學會編『大東文化大學漢學會誌』五六號、八一〜一〇二頁、二〇一七年)等。
- ⑦ 伊藤漱平編『中國の古典文學』、東京大學出版會、一九八一年、二〇三〜二二三頁。
- ⑧ 中國藝文研究會編『學林』三三號、二〇〇一年、七七〜一〇八頁。
- ⑨ 手塚山學院大學中國文化研究會『中國文化論叢』第九號、二〇〇〇年、二十〜五二頁。
- ⑩ 「適」の語は、まず「枕中記」冒頭の盧生と呂翁の對話に出てくる。(本文にて挙げた尾崎の論文は、『文苑英華』に引かれたテキストを用いているため、以下の引用文は全て『文苑英華』卷八三三 記、寓言(中華書局、一九六六年、四三九五―四三九七頁)より引く。)

翁曰、觀身形體、無苦無恙、談諧方適、而歎其困者、何也。生曰、吾此苟生耳。何適之謂。翁曰、此不謂適、而何謂適。答曰、士之生世、當建功樹名、出將入相、列鼎而食、選聲而聽、使族益昌、而家益肥。然後可以言其適

唐代傳奇「枕中記」の「夢」と「異界」を巡る物語認識の變容(伊藤)

乎。(翁曰く、子の形體を觀るに、苦無く恙無く、談諧方に適なるに、而るに其の困なるを嘆くは、何ぞやと。生曰く、吾は此れ苟も生くるのみ。何ぞ之を適と謂ふか。翁曰く、此れ適と謂はずして、何をか適と謂はんと。答へて曰く、士の世に生まるるに、當に功を建て名を樹(た)て、出でては將、入りては相となり、鼎を列して食らひ、聲を選びて聽き、族をして益々昌(さか)んにして家をして益々肥へしむべし。然る後に以て其れ適と言ふべし。)

また物語終盤にも、もう一つの人生を終え目覺めた盧生に對し呂翁は「人世之適、亦如是矣(人世の適、亦た是の如し)」と告げる。(ただし「人世之適」という言葉は『文苑英華』所收のテキストにのみ見られ、『太平廣記』では該當部分は「人世之事」となっている。)

この呂翁の言う「適」についての解釋は諸説あるが、尾崎はこの盧生、呂翁の述べる「適」について、「始め」において、「適」とは富貴榮耀であるとする盧生に對し、呂翁は眞の「適」とは盧生が「困」として嘆くつましい生活の中にこそあると言っている。しかし「終り」において、「人生の適、亦た是の如し」と語ってしまえば、「始め」で語られた盧生が求めた「適」も、呂翁が示した「適」も、等しく夢のようにはかないものだと思なしていることになるのではなからうか。(前掲注⑧、八九頁)と述べる。

- ⑪ 『中國文學の愉しき世界』岩波書店、二〇〇二年。井波は「枕中記」及び「南柯太守傳」について、「枕の穴の奥や槐の木の穴の奥に、廣がる異界を夢遊して快樂を盡くす。」（九八頁）と述べる。井波は本書の中で作中の枕中の世界を、「夢」の語はあまり用いず、基本的に「枕の中の世界」や「枕の中の異界」といった語で言います。（九八―一〇二頁）
- ⑫ 「枕中記の構想」（中國古典文學研究會編『文學と哲學のあいだ』（笠間書院、一九七八年）二〇三―二四六頁）乾は「枕中記」について「大體、古人は、夢の世界は魂の遊行の世界だと考えていたから、この意味からすれば、盧生が夢の中で理想の生活を送るのは、一の異郷訪問譚だということが出来る。盧生が夢の世界へ行くのは、遊魂の信仰をその發想の基盤としており、明らかに異郷訪問の形をとっている。」（二二二頁）と述べる。
- また井波、乾の他、近藤春雄も『唐代小説の研究』第二章第四節（笠間書院、一九七八年、八一―九六頁）の中で、「枕中記」について、「別世界が夢に至る世界」であり「神遊して至る世界」であると述べる（八九頁）が、一方で「枕中記」の枕中の世界を「夢中の世界」と漠然と言います（八二頁）。
- ⑬ 前掲注③の劉や、内山知也『隋唐小説研究』第四章第二節「沈既濟と『任氏傳・枕中記について』（木耳社、一九七七年、三四一―三四六頁）等も、それぞれ「枕中記」の背景にある社會狀況や作者について詳述するが、作中の枕中の世界は「夢」であると明記する。
- 内田道夫「唐代小説における夢と幻設」（『集刊東洋學』第一號、一九五九年、二―二二頁）、内山知也「唐代小説の夢について」（前掲注③）はともに豫兆の夢や鬼神と邂逅する夢など、唐代小説に見られる様々な夢の型を検討するが、「枕中記」については、人生の儚さを示す物語として捉えており、枕中の世界を表す語としての「夢」も、儚く容易に消えてしまふ存在という概念で用いる。
- ⑭ 『太平廣記』（中華書局、二〇一五年）卷二七六、二二八〇頁、出典は劉彥明『燉煌錄』。
- ⑮ 『太平廣記』卷二七六、二二八五頁、出典は『幽明錄』。
- ⑯ 『太平廣記』卷二七六、二二八七頁、出典は『幽明錄』。
- ⑰ 『太平廣記』卷二七六、二二八八頁、出典は『太平廣記』では『述異記』と記載されるのみで、祖沖之編のものか任昉編のものかは不明。ただし『太平御覽』卷四七九人事部、報恩ではこの出典を祖沖之の『述異記』とし、『太平御覽』卷四七九人事部報恩、中華書局、一九六〇年、二一九六頁より）、一方で『永樂大典』は出典を任昉『述異記』とする（『永樂大典』卷一三三三六、夢、中華書局、一九八六年、五六七八頁より）。この「周氏婢」の出典の問題に關しては、中島長文『魯迅『古小説鈎沈』校本』の祖沖之の『述異記』（京都大學中國語學中國文學研究室、二〇一七年、三〇六頁）を参照

した。

⑱ 『太平廣記』卷二八一、二三四二～二三四四頁、出典は記載されず。

⑲ 『太平廣記』卷二八二、二二四八～二二五〇頁、出典は『異聞集』。

⑳ 『太平廣記』卷二八二、二二五一～二二五二頁、出典は『聞奇録』。

㉑ 『宋瓊』、『邢鳳』はそれぞれ『太平廣記』卷二七七（二一八九～二一九〇頁、出典は『夢舊』）、二八二卷（二二四七～二二四八頁、出典は『異聞錄』）に収録。

㉒ 『宋言』、『薛存誠』、『劉景復』はそれぞれ『太平廣記』卷二七八（二二一〇～二二一一頁、出典は『雲溪友議』）、卷二七九（二二二〇頁、出典は『續玄怪錄』）、卷二八〇（二二三二～二二三六頁、出典は『纂異記』）に収録。『太平廣記』「夢部」にて「夢」の語が用いられない作品はこれら三作品のみである。

㉓ 『太平廣記』卷二七八「宋言」（前掲注㉒）より。

㉔ 前掲注⑱より。

㉕ 前掲注⑲より。

㉖ 引用文は『太平廣記』卷二八一、二二四四～二二四五頁より。出典は『河東記』。

㉗ 「獨孤遐叔」の他、同じく『太平廣記』卷二八二が「纂異記」より引いた「張生」（『太平廣記』卷二八二、二二五〇～

唐代傳奇「枕中記」の「夢」と「異界」を巡る物語認識の變容（伊藤

二二五一頁）もまた、主人公が瓦を投げることで具現化した妻の夢が立ち消える場面がある。

⑳ 引用文は『太平廣記』卷八二、五二六～五二八頁より。

㉑ 『太平廣記』所収のテキストにあった「寐中」の二字は、『文苑英華』所収の「枕中記」のテキストには存在しない（『文苑英華』（中華書局、一九六六年）卷八三三、四三九五～四三九七頁参照）。前掲注④の王夢鷗の指摘に依據すれば、「寐中」はオリジナルの「枕中記」にはなく、晚唐陳翰が『異聞集』編纂の際に補足したと考えられる。

㉒ この點に關しては、乾一夫「枕中記の構想」（前掲注⑫、二二七頁）、近藤春雄「唐代小説の別世界」（前掲注⑫、八二頁・八九頁）に同様の指摘が見られる。中野美代子「仙界とポルノグラフィ」（河出書房新社、一九九五年、二五七頁）にも「枕中記」は仙界譚の流れを汲んでいるとの指摘がすでにある。

㉓ 題は『太平廣記』卷一九七参照。引用文は『宋本藝文類聚』（卷九四獸部中、羊、上海古籍出版社、二〇一三年、二四一九～二四二〇頁）より。また宋代の「類説」は『殷藝小説』よりこの物語を引く（曾慥『類説』卷四九、北京文學古籍刊行社、一九五五年、三二四六～三二四八頁より）。（中島長文「魯迅『古小説鈎沈校本』（前掲注⑰）の『殷藝小説』（二二三～二四四頁）及び『幽明録』（三八五頁）を参照。）

㉔ 『太平廣記』卷二〇、一三四～一三五頁、出典は『博異志』。

③③ 「張華」のような、穴をくぐり、開けた土地に出るといふ物語の展開は、六朝志怪の異世界訪問譚に度々見られる。有名な例としては「桃花源記」があり、作中で桃花源へと赴く場面で、漁師は狭い穴をしばらく進み、開けた土地へと出る。このような様式は唐代傳奇の異世界訪問譚にも受け継がれており、本文で例に挙げた「陰隱客」の往路の場面でも、暗く狭い道を潜り抜ける描寫がある。

③④ 赤井益久「枕中記」校辯（前掲注③）に、「枕中記」における道士の枕は、それ自體の中に空間が存在し、小宇宙を形成しているとの指摘が既にある。また井波律子は「枕中記」の枕中の世界について、「ミニチュアの世界にほかならず、ここでは時間の流れも急テンポとなる。」と述べる（前掲注①、一〇二頁より）。

③⑤ 引用文は『後漢書』（中華書局、一九六五年）卷八二下、方術列傳下、二七四三頁より。

③⑥ 引用文は『北堂書鈔』卷二三四 服飾部枕、中國書店、一九八九年、五四一頁より。

③⑦ 「楊林」については、魯迅が、前掲注①五八頁にて「干寶《搜神記》有焦湖廟祝以玉枕使楊林入夢事（見第五篇）、大旨悉同、當即此篇所本（干寶《搜神記》に焦湖廟の巫が玉枕をもって楊林を夢に入らせる話があり（第五篇に見える）、「枕中記」と）あらまは同じであり、「枕中記」の基となっている。」と、「枕中記」の前身であることを指摘する。

③⑧ 『太平廣記』卷二八三、二二五四頁より。

『太平實字記』にもこれとほぼ同じ文面が引かれており、こちらは出典を『搜神記』・『幽明錄』とする（『太平實字記』卷一二六、中華書局、二〇〇七年、二四九三頁より）。この点について中島長文「魯迅『古小説鈞沈』校本」（前掲注①⑦）は、「按廣記引與實字記引文略同、「宋世」二字廣記引有、然則是宋世之故事、當不見於搜神記。但實字記引無「宋世」二字、而且實字記所引文不見今本搜神記、又此條未見他書引作搜神記。（『太平廣記』の引用と『太平實字記』の引用文とがほぼ同じであることに基づけば、「宋世」の二字が『太平廣記』の引用にあり、これは宋の世の故事であるため、當然『搜神記』には見られないはずである。ただし『太平實字記』の引用に「宋世」の二字はなく、さらに『太平實字記』の引用文は現在傳わる『搜神記』には見られず、またこの話を他の書が『搜神記』のものとして引く例も未だ見られない。」（四八二～四八三頁）と述べる。

③⑨ 前掲注⑫、二二〇頁より。

④④ 例えば赤井益久「枕中記」校辯（前掲注③）、下定雅弘・森本早織「盧生は何を知ったのか？」「枕中記」の主題——（前掲注⑨）には盧生の赴いた枕中の世界について同様の指摘が見られる。また乾は前掲注⑫、二二六頁にて「枕中記」の夢の世界は、決して異類の棲む異郷ではなく、現實の人間世界だということである。」と述べる。

④1 『太平廣記』卷八六、五六一頁、出典は『野人閑話』。

④2 中には、異人と交流する一般人の名が題とされる物語もあるが、この場合は異人が名前のない匿名の人物である場合がほとんどである。

④3 尾崎裕「枕中記」と「南柯太守傳」―その《椀》を手がかりに―(前掲注⑧)にも、劇中劇に當たる盧生の第二の人生の外椀には呂翁主體の物語があるという指摘がある。

④4 實際、晩唐の『異聞集』では盧生が椀の穴に入る場面の前に「寐中」の二語が補足されている。椀が當時も寢具であり、枕といえは「眠る」という認識は『太平廣記』成立以前も一般的であっただろう。

④5 この点については、尾崎裕がすでに「枕中記」と「南柯太守傳」―その《椀》を手がかりに―(前掲注⑧)にて、「枕中記」の《椀》は、まさしく呂翁の物語(八六頁)と述べた上で、「讀者は往々にして呂翁の存在を意識の片隅に追いやってしまい、(中間)で述べられている、夢遊という不可思議な要素に依存したモチーフと、そこから導き出される盧生の價值觀の轉換に目を奪われてしまうのである(八八頁)と指摘する。

④6 李肇『唐國史補』(上海古籍出版社、一九七九年)五五頁。

④7 『文苑英華』卷三七八(中華書局、一九六六年)、一九三二頁より。

④8 ただし房千里は、「列禦寇敘穆天子夢遊、近者沈拾遺述枕

唐代傳奇「枕中記」の「夢」と「異界」を巡る物語認識の變容(伊藤)

中事」と「枕中記」を『列子』周穆王の夢遊の話と並列して言及しており、これら二つの話を同種のものとしなしていることが窺える点には留意すべきであろう。(赤井益久「枕中記」校辯(前掲注③)を参照)

④9 「枕中記」を題材とした北宋、南宋の詩歌については、岡本不二明「宋詩にみえる「枕中記」の影響について」(『岡山大學文學部紀要』五八號、二〇一二年、二七一―四一頁)を参照した。

⑤0 『王荊文公詩箋注』四二卷、上海古籍出版社、二〇一〇年、一一〇四頁。

⑤1 『范石湖集』一二卷、上海古籍出版社、一九八一年、一五一頁

⑤2 洪邁『容齋隨筆』容齋四筆卷一(中華書局、二〇〇五年)六三九―六四〇頁より。

⑤3 「黃梁」の語は『文苑英華』系統のテキストには見えず、『異聞集』及びそこから引用した『太平廣記』系統のテキストにのみ見られる。「枕中記」を指す語として「黃梁」が度々用いられることから、當時『異聞集』及び『太平廣記』系統のテキストが流通していたといえる。